



新撰
名卷

菱勺五百題集

中村六平編

坤



新撰
名卷

後勺五百題集

秋七部

名月

名有北影浦 江口丸
 くの自さるる せぬ光り哉
 名変よつ 流るありけふ
 さ—— 浦の白く せぬをたのむ
 名有せき—— 八海き 庭の署
 名もや 控燈を する人 大維

蘇庵 太平
 一具庵 尋香
 深掛園 茶雄

編 校

英湖
 之書
 本派
 龜山
 斗大
 石木

11

月見

名月や出づ居てやまらふ月見
名月の浮出く空の深さく如
丸書や一とせぬりの月と書
けりるやまらぬひやまらぬの
名月や州本らるるの置文
危を指す月をうらむる丸
名月や神代とまらぬの水文
四つ解つをうらむる月見
本隠すそまらぬ月見

芳子
大年
壽石
連水
連水
連水
史城
逸布

月

月よりけり月の光や夕や
秋鳥も遠く空をや月の光
月けやまらぬ月見
見ちるや月少ぬる月の光
石山の石の光や秋の光
月よりけり月の光や夕や
夕月ありてまらぬ月の光
暮をぬる月の光や夕や
月よりけり月の光や夕や
入舟もまらぬ月の光
月よりけり月の光や夕や

尋香
精知
見あ
之友
旭日
之友
素新
親富
知来
逸郎
梅香

月のせいでく影もよ海をく
 湖よりくまぬや秋のう
 是岸よの月や夕暮り
 月の澄み渡る池の波
 山あり音澄まのり 秋のうき
 秋の月河さのふり入り
 風の香の厚りのまの秋秋の月
 月少ぬの雲もよみ 山見飯
 七月 初月や小宮井りお柳
 ひとむい海き色きり 初月秋

祖康 右年 採花 予七 浪見 素粒 梅実 如成 廿亥 雅佛

結宵 結宵やあまの月をききり
 結宵に呼ぶ係もききり
 中の影をききり初月秋
 梅実

十六夜 十六夜お籠るぬ夜のはけ
 中ら兼せ海のせりお壁よ入る
 山あり音澄まのり 秋のうき
 秋の月河さのふり入り
 風の香の厚りのまの秋秋の月
 月少ぬの雲もよみ 山見飯

後の月 貴の香おるは初月
 並枝のふり海は初月

湖月 風名 梅実 立高 梅林 立高 清民 初月

つらねあまもろくをいそぐれ石の月

未死

つらね

つらねあまもろくをいそぐれ石の月

未死

つらねあまもろくをいそぐれ石の月

未死

経田那

経田那の月

未死

経田那の月

未死

経田那の月

未死

経田那の月

未死

乙月

乙月の月

未死

乙月の月

未死

乙月

乙月の月

未死

乙月の月

未死

初秋

初秋の月

未死

初秋の月

未死

初秋の月

未死

初秋の月

未死

初秋の月

未死

立秋

秋之やあり輝をそと波を
去るあり秋やありや山家より
風習る音も秋なるをきし
第目よ立秋知や門押除
秋よりや船の海を去る
拭き押す秋のそと
秋は水や秋なる海を去る
秋をきく古びし
秋のそと
秋なるや海を去る
秋のそと

浪足
波通
芦池
里路
寄屋
成史
梅素
畔来
荷産
理丸
白浪

五

七夕

輝る立落葉の色や
輝る山を深き
輝る山を深き

精知
成路

達ふおれおるふ
輝る山を深き
輝る山を深き
輝る山を深き
輝る山を深き
輝る山を深き
輝る山を深き
輝る山を深き

輝聖
右海
子外
一具
笈岸

三の川

門くの輝る山を深き
輝る山を深き
輝る山を深き
輝る山を深き
輝る山を深き
輝る山を深き
輝る山を深き
輝る山を深き

湖多
成

少芝の海へ海へりての川

伝足

糸の系

根の系や始り糸の系なり
細く中々もさしけり糸の糸
思ふも糸の糸の糸むきひあり

正茂
之休
浪足

傍小袖

衣をきりも情の家が
衣をきりも情の家が
衣をきりも情の家が

蓬堂
我村

栴結

結の糸はびりりそあり栴結糸
寒波に佛り上げく栴結糸

精一
年雄

言煙籠

言煙籠の言と人言煙籠
衣更も言煙籠の言と人言煙籠

冬扇
石木

煙籠

言煙籠の言と人言煙籠
衣更も言煙籠の言と人言煙籠

杉成
一明
右送
吉藏

色中

甲より色中を結して色中
色中より色中を結して色中

静五
海之

今更に之を神草不戸口

孫宗

送中

送中の中より子星を存心
且葉おそく中のある藤
送中火の消へて送中

法澄
法澄
聖松

魂柳

魂柳や強走に唐の
常備柳や春の
情を身より

右南
有海
壽北
静外

芋煮

割着まある法
息才 equal 中
人の母は長

對岳
竹良
正才
水成

生身

色やぬ無を
生身魂
我すのい

正茂
浪足
達海

踊

踊るる
桑の葉も柳

右年
山外

手をたたく出さす下海をとり
情れなき手は甲一重なり 盆踊
津踊や磨斗むき 登の一本
田唄より一甲一重なり 盆踊
松多皆持ふふとこれ多きなり

杉百
斗大
星海
松成
浪足

西瓜

吉市のとち相見き 西瓜一甲
水引の掛やうの如き 西瓜一乳
向島の香も多き字く 西瓜一甲

梅嶽
吳智
弘池

花火

松尾より響くわき花火の乳

舞中

花火一と花火更なるなり
消滅する消滅西の西の花火の乳
急ぎ急ぎ（更）花火の乳

旭日
弓木
浪足

沙更

新しき花火一甲のちりり
年毎のつのもとも沙更の乳
是のころ花子或り花沙更の乳
花火のちりり花火のちりり
細舟より一甲のちりり沙更の乳

才松
汰美
甘堂
佳笠
梨英

お撲

あつとたつた花火のちりり

浪足

秋風

花や又年ハ寄り角方六
馬下り古の通角力わぬ
身ハ心ノ理まは回一すまひ
古きより新しきハ撰取
の逢ふと思ふ成程まひとり

梅年
雪海
ト早
久禮
若金

漁生ま及口更さる秋の地
秋風は骨も切ると思ふより
秋衣の手つとく其也を履き
鎌倉の古ひひさうあきのうを
生野の地もあかり秋の風

茂樹
如藤
里糖
碌月
瓦玉

しら涼

揺くと篋をつりぬ秋のそを
秋風や揺んく揺る袖の蒼
秋風の吹まきりくう一あれ
あふ程もあはさる秋のうを
利根川の水鳴りまきり秋の風
水あまはるを流せり秋の風
松の只吹く河原より秋の風
目の氣はあはれ水は秋の風
秋風や竹をあまきりまの口

竹葉
一輪
美色
うらあ
右年
梅実
半古
藍山
若葉
桐葉

白晴のけを涼一庭あひ

倉庫くのもうめさくし約葎
 川さきのよ初めは海一角田め
 初添一蟹つんさけたはき肉

粟菜
 系雄
 葉疎

置扇

書けらおりよたのん置扇
 忘さるも抄はなほある扇の如
 語置一扇さうと縁柳
 蘇忽ふおるく日さき一扇の乳

逸郎
 梅素
 坊哉
 法足

持扇扇

福扇らわ扇扇忘さく二叔之親
 垣根まるさくくさうり持うさるを

梅裡
 郊外

花のまらふの、持ぬきま扇

梅実

つら巻

月の巻一吹つてありまら巻
 海草巻沙ふひたそはけり巻
 柳さきた一うありま初あじ
 清うらさき思さく石まなまら巻

為梁
 卜早
 橋白
 送即

霞

山崎さうりりくく霞あまは
 野い霞よ修うもされく新のうさ
 霞の玉ちまま押さき糞まらり
 流いのすめはらうまららり

為山
 杉白
 宗阿
 梅素

竹のつゆをぬやうと降りたり
思ふ存ち移りて散る秋露の玉
明き重く露をく居るや露の戸
露草の泣くも浮ぬはひきり
沙草生の露よ花と玉移りぬ
灯もせはま一床も露のり
中へ寝はあぬよ露のこねぬ
露とては移りすうやまの露
うらやあ露の寝起も五十年
朝や海へみるは海の色

山麓
久あ
お遊
又産
蘇翁
月石
上系
梅実
之想
辰足

霧

朝くハ、霧をまうたの伏せられ
遠い燈の光もやまき霧の中
十重子霧の海へし移りぬ
本松の葉も霧のり霧の朝
空をうら日の白くも霧の朝
霧の葉も霧のり霧の朝
波光る汐先音——霧の海
あかると霧うらるる霧の海

キノ
蘇翁
如来
遊り
雪叢
岫石
満末
杉子

二百十日

霧の降けなきのこまなり

霧屋

二百十日 霧多き 志多き

遊初

そは陣より敵討く二玉十の事

法足

稲妻

稲妻よまをふもよや縁の基
つよつよの丸付きあー
稲つよや初秋上る袖の力
稲妻よ暖のさく水稲車乃
稲つよやあまをあまをまの毛
いの妻よまをまの毛のさくあま

共なき
右甫
杉成
沙山
秀菜
梅実

聖分

月夜一あまのつよよ聖分哉
初まはは月ハ出あー聖分縁

一海
知来

秋アをそ縁とうくも聖分哉

葉妻

早稲

稲よや縁対あまの早稲の葉
早稲の葉よ風もあまをさく吹

葉草
才賀

稲

稲よよ人もまをそあまの
嗅きまを縁のさくー稲妻
葉の風を余あまのつよ稲縁
山産やまをまの葉の稲さく
世承りの稲よまをそあまの
あまのあまをそ稲よ縁

梅妻
尾高
葉菜
文徳
武伯
右翁

稲りのり月日のむむサ稲のさ
稲う波らそおのせささう
思ふあきささのりもね稲のさ
白のり内て稲さささ
水さささ里や群ささ稲のさ
うけねのささあさぬさ
思ふねささ稲のさ

美色
梅実
古年
露屋
杉白
浪足
暢字

落種

杖のささ露掃くささ落種
一七さささささ落種
都右のさささ落種

之左
半古
梅実

八束穂

八束穂や京の伯父さささ
八束穂さささ杖ささをさ

露屋
松の

木綿衣

ねさささ木綿さささ
と物さささ物さささ木綿
西さささささ木綿

正次
如華
左梅

田川

廣くさささ田川
深ささささ田川
さささささ田川

梅実
浪足
深

新米

産ル産滿ルふとすく年米
小家右と程賑しく也こと米
とつての事と文と飲と米
新米や升ル俵も古ぬ穀
新米や俵隣りともあり

一 瓢
芹 全
為 梁
梅 倉
其 道

ハ 初

ハ初や実の入るやうぬ家の玉
ハ朝や都つめの宿り
ハまゝの日をいゝぬ小田高也

松 聚
飛 舟
未 北

放生会

放生会母より一なるちまう
出らむの存ありぬ放生会
梅もつとくもゆも放生会
花をいゝ日ありぬ放生会
春はあはれ花も散れば春もあはれ
皆ハ幡もあはれも放生会
ておちる智日梅も向ん春もあはれ

柳 外
半 古
春 白
素 遊
孫 燈
五 風
柳 実
柳 成

鳴子

日比筋のまゝにけり鳴子幾
引けりや風も生る鳴子幾

柳 成
欠 里

紫山子

勤みぬ人勤みぬ紫山子赤
其後まぢくふ紫山子我子乳
里人やうーに紅糸のやま
隣うう乃を喉かき紫山子
仰むまは月を仰りのうーい

赤山
七年
富山
浪見
右邊

引板

川より返るや紫の海を引板
引板うけと書ふまを舟孤れ

紫海
扇心

玉川

玉川のまゝあれる紫山子

梅布

遊みぬの御まのけららるる紫山子
里のまを疎持歩り紫山子水

念々
果糖

船

船をよめる船や遊船りまを船
船をよめる船あう船をよめる
船やよめる船はう紫山子

浪見
赤山
赤山

紫山

紫山日の紫山子河
水香のひらき川流や紫山子
紫山子あう紫山子紫山子
紫山子あう紫山子紫山子

紫山
旭扇
紫山
赤山

初能

初能也何處了静てけは

玄子
初能

翫

沙也子也了をそあつて
何にけけ翫引くや日利重
空言一翫よあつて
不為におろの祝子引
捨てさきさきも程か
田畑の富しやとさる翫
引あつて男は

逸評
露屋
キ
梅雪
静外
素映
未曉

沙真

沙真物も終つてひさ
沙真物も終つてひさ

左海
右逸

新

新也何や歌とさる
新也何や歌とさる

左海
一時
好

砧

砧也何や歌とさる
砧也何や歌とさる

左海
清民
進

打合の破少きけし 青月東
痛く母少き字を重き打碇り
水音如河の底の遠碁

弓木
竹葉
涼揮

ヤ
ヤ
漸きを苦ありふ二の左海

壽多
仙五

物
砂のゆくは物にきく 芝きぬ
物空のまを屋にほる情けり
物きや門不中きく富士まむ

旭扇
情我
浪足

秋寒
むしりや物にきく
廣い間より燈いより秋空に
流り来る物に秋空の羽多
物いより物にきく夜空を春

之友
管月
法足
舟池

新海
さききく物にきく
さききくの物にきく新海うら
古き名を重き物にきく新海うら
帆をきく物にきく新海うら

梅実
法足
壽形女
海松

新
さききく物にきく

竹葉

新川のや深山の雪とる 廣留

五松

長春

白くあり月を成しとく 松はまき
葉の落りりつとぬ 長二年

寸物
太靴

秋の澄

秋のつゆの澄み 澄みとる
秋の澄み 澄みとる
あきの澄みとる 澄みとる

浪足
清嗣
風馬

秋の響

葉子とるく子をなす 秋の響
しきりとりと家にあきの響

里橋
浪足

中島よ同ふくみ 秋の響
芦垣ははるく白や秋の響

キノ
蓬草

秋の夕

手を打てた山とて 秋の夕
ゆきやとんやとん 秋の夕

半古
宝羅

秋のあ

こもあし 秋のあ
け 秋のあ
はい止る 秋のあ

桂七
蘇翁
花毒

秋のあ

葉の色を 秋のあ

松成

心なきうらをやくさみゆ秋の暮
まらこーは想ふ葉もくは秋の暮

方海
江浦

秋の雨

涙舟の糸香くもさやー秋の雨
むーの香の好程寂く秋の雨
琵琶強く静そーぬ秋の雨

家屋
斗大
保水

秋の空

まらぬ星の光りや秋の空
葉のけくー葉のけくー秋の空
秋の空田中の杉の目をさる

撲強
十露
仙居

秋の心

秋の心はつゆーちのー秋の心
修羅船のやうな秋の心
秋の心灰う箱ハきりけり

杉地
堀川
呂儀

一葉

秋の心はつゆーちのー秋の心
日は柳の皮をさるー秋の心
ととつふ今やつふ今よほー秋の心
新糸湯沸かすー秋の心
夕空の風をさるー秋の心
うらをさるー秋の心
一葉ふちりー柳の裾の

梅室
右左
龜山
山本
清民

ちり物

人見んと戸の邊
柳ちりけの燈
田舎をく町

正
月
夜

木槿

底のよき
花をみる
乳をみる
水さる

身
雪
可
後

木犀

木犀の葉を
木犀の秋の
木犀の葉を
木犀の葉を

里
竹
水

初紅葉

里の初紅葉
家のおの日
初紅葉

宇
山
采
木

さくら

さくら
美し
わさくら
さくら

眠
石
木
木
木

梅をこゝに梅をこゝに梅をこゝに

手抄又三つに去梅

糸糸の遊も海もんさるる

山々や紅糸のやもんと通

あま中よつそらあまあま紅糸をい

り水もさるも際立れみちりれ

悔もあま路りを更出れ紅糸我

紅糸はさるる経つてや日初を

夜のもも紗さるる海の紅糸をい

海もさるる風情さるる山々みち

濁りいもさるるぬさるるお糸をい

水産さるるぬ紅糸の遊もさるる

けいさるる梅のけいさるる紅糸

木の葉

風さるる日初をいさるるお糸をい

袂あさ子の所産あさ木のさるる

栗

ませ栗やさるるまはさるる一旭

いの栗さるる一粟のさるる

初より一粟のさるる栗

皆をさるる是さるる

栗ひらひさるるさるる

杉

宗

井

詩

茂

堂

管

松

吳

梅

ト

早

疎

月

高

逸

逸

屋

いの葉よ手甲しんがねや

柿

柿下指しんがねや

水新柿すいしんがねや

近ちかるる石いしこのこ思おもひひ也や柿かき古ふる家か

月つきああままくく勢せい持もちりり約やく一一柿かき

落屋

逢海

送郎

熟柿

ささんんととももやや又また一一下げ剥はくく熟じゆ柿かき

晴はりりくく熟じゆ柿かきののままやや露つゆののちち

喜山

清民

木の子

小こ松まつ如ごとくく思おもひひをを表あらわすす木きののまま

松まつののままははちちののままももちちののまま木きののまま

呼よびひ合あいいわわるる運うんんぬぬ也や右みぎののまま山やま

切き柿かきののままとと出でるる木きののまま子こののれれ

四よ阿あをを流ながすす意いをを表あらわすす木きののまま子こ

行いききのの道みち小こののまま木きののまま子こ柿かき

笈山

半山

市川

芝城

浪見

葺指

葺ふくくののまま也や山やま邊へ守まもりり一一袖そでののまま

知泉

ふたり

胸むねををああららわわししつつままややのの葉はをを用もちむむ

時ときををははりりたたままふふ

糸板

雲峰の石より初りて
中よりおのりぬ
糸板より一軍より石より

字のむ

飛くは秋のやまはむ
昇る地を引きよき
こぼるは雨露のまじり
糸板のむより一寸
糸板よははむく種く
あふまよきく流りや

精加
秋峰
浪足
糸板
梅嶺
一村

糸板

中少数の秋意を
大なる雲を引く
ゆきしを引く

糸水
乙二
念こ

水引

水引の糸を引く

浪足

枯板

枯板より海軍より
一旗当きはましく
水引より引く

糸水
初外

蘇をよ 理をよめは石ころひせし蘇精

をよ一 音のよまよふくをよ一

むよけき夜の中やめくさ

何よまほふくまをよ一めを

余のよよふくめはやをよ一し

巻糸のよほれりゆら一女神也

男一 有うけや武徳いさうの男一

まよくまよひらら一男一

娘はぬきをよまをよ一し

知

形

蘇

松

素

不

梅

新

葉のよや新葉吹そ人ひふ

あまのよや月朗うまほる垣

新鳥や破き一垣もあらう

新葉のよけが隣のもよ中

新うらや品定うらけよ海葱

あまのよや花散るまよひて

新葉やまほりて花散るまよ

新鳥はほひぬきや垣もあら

新うらや破きよ垣もあら

あまのよは僧まうらひ利も

蘇

浪

善

益

蓬

雪

花

五

信

信

新秋や人のあはれむらね内
あまうねや持ふ葉もさるる
新秋も手をひき引 踊たれ
あま秋の心をあまの夕のたね

里新
半古
組新
古年

美草

美草やとてはこころは美草を
あまの心ゆくこころは美草を
大枝も伐りかゝる美草を

半古
自惚
之嵐

萩

萩あり月あり萩のゆらゆら
新秋は——萩をこころは萩を

宇山
精知

ささげやとてはこころは萩を
くむや小萩うもとの露のゆく
折る音も萩はさるる——二枝
あま遠くもとては萩のゆらゆら
萩初る心を萩のゆくゆく
こころあまの萩のゆくゆく萩
あまのこころは萩のゆくゆく萩
萩をゆく風ゆくあまの萩のゆく
萩のゆくゆく萩のゆくゆく萩
あまの萩のゆくゆく萩のゆくゆく

之友
尋香
半松
院頂
竹葉
六洞
小早
家屋
藤雄

たむ紙

花鳥集の正教女のみ唐の舟
歌一首ありと集ル河をさせ成りぬ
破きしと風和らふと道なき
向きしと寂をやりしと道なき

浪
余
東
重

秋

あつと河へりしとや秋の夢
あつと又まの星は秋の夢
秋の夢とあつとと秋の夢
秋の夢とあつとと秋の夢

乙子
祖康
宗
重

花

まやまの花の功業
横きよは里の日中や花の功業

為
曹

うら

花と人の心と花の功業
うらと人の心と花の功業
うらと人の心と花の功業

暢
水
露

花

花と人の心と花の功業
花と人の心と花の功業
花と人の心と花の功業

法
梅
蘇
河
梅

尾花

根を中より水を得てはもてはる
古のたをたしめぬはすねぞすしそ
とあつらふむのく尾花甚うお

夕陽のをききり更ゆる尾花を
中ねるはくまの袖あはく尾花を
寺遠りいふはむい持つをはぬれ

望み

原中より望みある高の望みくは
望みせし望みある望みあは
病れぬく仲を望みあるのきくは

熊手子小護ちのあけぬ望みあは

望まの花

暎を結くあはくはのきくは
望まの花咲くや花たのきく角
秋のたのきく花を望まの花
山畑や雲のくあはく望まの花

本城川

それとくくきく望まの花本城川
川干よきくく望まの花本城川
遠くは細き月見く本城川
ちやくきく望まの花本城川

津島
桂島

左岳
砂敷
孫雄

扇山
安由
植子

寺海

益山
露屋
甘志
永機

新島
舟雄
乙種
寺海

系瓜

桜井りは思ふのふそと系瓜
秋まよはるをそと系瓜
あらくと系瓜秋のそと
そと瓜の地を踏むはつと

海
花
乙
曉
山

瓜

管外よきは白くあそ
はつとまよはるそと
秋まよはるのそとはあそ
庭をまよはるそと

暢
住
仙
一
保

うす瓜

名あも秋の瓜のそと
そと瓜のそと

鈴
浪
足

瓜

そと瓜のそと
秋の瓜のそと

浪
足
半
海

番椒

瓜のそと
秋の瓜のそと

尋
味
子
麻

とあそび

あそびの里のあそび日よふけり
あそびのあそびあそびあそびあそび

除
全可

鬼神

鬼神あそびあそびあそびあそび
鬼神あそびあそびあそびあそび
鬼神あそびあそびあそびあそび

鬼神
竹葉
浪足

新

新あそびあそびあそびあそび
新あそびあそびあそびあそび
新あそびあそびあそびあそび

新
浪足
素粒

新あそびあそびあそびあそび
新あそびあそびあそびあそび
新あそびあそびあそびあそび

干麻
素粒

夢

夢あそびあそびあそびあそび
夢あそびあそびあそびあそび
夢あそびあそびあそびあそび

夢

葉

葉あそびあそびあそびあそび
葉あそびあそびあそびあそび
葉あそびあそびあそびあそび

浪足
半古

木通

木通あそびあそびあそびあそび
木通あそびあそびあそびあそび
木通あそびあそびあそびあそび

木通
素粒

蓮の空元

昔の空の元や 風吹く可なり
昔の空を元とて 空の元なり

右 空

梅

梅の空元 梅の空元
梅の空元 梅の空元
梅の空元 梅の空元
梅の空元 梅の空元

梅 空

末 栢

末の栢 末の栢
末の栢 末の栢
末の栢 末の栢
末の栢 末の栢

末 栢

末

末の空元 末の空元
末の空元 末の空元
末の空元 末の空元
末の空元 末の空元

末 空元

雪のふりて 春のついでに 花のさき けり
小女も 春のついでに 花のさき けり
花のさき けり 春のついでに 花のさき けり
花のさき けり 春のついでに 花のさき けり
花のさき けり 春のついでに 花のさき けり
花のさき けり 春のついでに 花のさき けり
花のさき けり 春のついでに 花のさき けり
花のさき けり 春のついでに 花のさき けり
花のさき けり 春のついでに 花のさき けり
花のさき けり 春のついでに 花のさき けり

結露 一 太 佳 物 海 百 知 富 理
丸 山 来 号 見 号 来 山 丸

菊 花
老僧の手 花のさき けり 菊 花
花のさき けり 菊 花
花のさき けり 菊 花
花のさき けり 菊 花
花のさき けり 菊 花
花のさき けり 菊 花
花のさき けり 菊 花
花のさき けり 菊 花
花のさき けり 菊 花

之友 水 様 卜 早 呂 柳 如 成 露 屋 清 風

理山 花
花のさき けり 理山 花
花のさき けり 理山 花
花のさき けり 理山 花
花のさき けり 理山 花
花のさき けり 理山 花
花のさき けり 理山 花
花のさき けり 理山 花
花のさき けり 理山 花
花のさき けり 理山 花

結露 一 太 佳 物 海 百 知 富 理
丸 山 来 号 見 号 来 山 丸

おやしのあし 紀重あしと 橋を
もちまらふと 玉姫山のほとり 暮る

梅実
浪見

烟

烟や 橋つゝ ひとり 夕の霞
ひらり や 入日の 影を 色岬
烟と 海に さまよふ 夢の舟
烟や 夕 海に せましく 子を 存す

西馬
浪見
万子
解石

秋の煙

夕の煙 霞の 秋の 暮の色
日つかりを 告ぐる 秋の 煙
橋の 影を けし ぬ 秋の 煙
秋の 煙を けし ぬ 秋の 煙

美色
梅雄
白露
豊海

秋の煙

玉碑く 家よ 秋の 煙
軽く 飛ぶ 影の 秋の 煙
又 夕 暮に 暮る 秋の 煙
橋の 影を けし ぬ 秋の 煙
夕の 煙を けし ぬ 秋の 煙
夕の 煙を けし ぬ 秋の 煙
夕の 煙を けし ぬ 秋の 煙
夕の 煙を けし ぬ 秋の 煙

清民
浪見
三友
朝香
晚香
秀葉
三梅
梅実

秋の管 水音より引く 秋の月をく丸

霜星の如き 秋の管より

月夜

好音

秋の掘

うきうき 掘り自ひまぬ 秋の掘

文政

秋の板

秋の板や老ねの人の音より

菊多

秋の板の残る 目出さる月如丸

夕雀

秋の板の音あふひより音は

史好

情於

筆埃よりまけを返る情於

鶴橋

たきよきまきまきあけ 情於

之友

情於のさけは 涙ぬき

浪足

胃音をこきく 舌とんぼり

卜早

向情のゆききき 赤情於

上野

秋の日の和さきき 赤情於

如成

情於

情於の下のやうに 情於

精知

出る雲のよき 情於

物字

む

留る音より 情於

うき

む 情於のよき 情於

双峰

情於のよき 情於

如水

おのゝ音ハ澄くくくおのゝ山を
あまくととせりありむの
まきつるまきつるまきつる
むしつや甲只の連河

梅実
素
梅
招

きんぐり

おのゝ音ハ澄くくくおのゝ山を
あまくととせりありむの
まきつるまきつるまきつる
むしつや甲只の連河

梅実
素
梅
招

松むし

松むしや甲只の山を
あまくととせりありむの
まきつるまきつるまきつる
むしつや甲只の連河

永機
堂海
松成

松むし

松むしや甲只の山を
あまくととせりありむの
まきつるまきつるまきつる
むしつや甲只の連河

堂海
仙羽

棟

棟や甲只の山を
あまくととせりありむの
まきつるまきつるまきつる
むしつや甲只の連河

旭
梅実

時や折葉葉の手にしり

花海

い

り燈の墨やうきし鳴い

草字

ふこと置けいけいし

手古

葉を

きくくくくくくくくく

形成

数寄屋しりりりりりり

精加

葉のたをはふれぬまの

浪弟

く

蕨減しきいひくくく

若翁

扱されくくくくくく

梅帝

詠む一の雲の

甘寝

端柳

端柳や後つらりの花の上

若翁

端柳や夏くくくくく

而后

端柳や春はふれと秋のむ

送次

たうらうや生まてふけ

五明

端柳や燈思ふれハ

逸郎

端柳やたうらうの

露屋

くくくくくの子

一

端柳や等余ふぬ

素葉

端柳や人の居ぬ

一村

蛇

足をくくくくしてあいた
たき種くさるる種くさるる

梅子

一村

蛇穴入

蛇穴のそと海あき山家うら
出た蛇くさるる蛇の穴くさるる

一村

味美

渡り鳥

鳥をうを羽うくくくくくくく
鳥のうを羽うくくくくくくく
鳥のうを羽うくくくくくくく
鳥のうを羽うくくくくくくく

吉家

長木

之友

茂精

鳥や梅くくくくくくく

梅実

まら

まらや砂地を過る鳥の穴
初鳥やまらくくくくくくく
まらやまらくくくくくくく
まらや海のうらを命のふ
初鳥やまらくくくくくくく

浪足

黙平

一村

青丸

美勢

鳥

鳥の穴の穴をくくくくくくく
鳥の穴の穴をくくくくくくく
鳥の穴の穴をくくくくくくく
鳥の穴の穴をくくくくくくく

副堂

秋峰

龜山

鵜鴫

一巻や 花とまゝのつらぬ巻
雪のふりふりや 向ふや 花のまゝ
つらぬ巻と 花のまゝ 花のまゝ
つらぬ巻の 花のまゝのまゝ

上野

宇心

美芸

水成

浪見

美常

一扇

一扇

鵜鴫

やうら

花のまゝ 花のまゝ 花のまゝ
おのまゝ 花のまゝ 花のまゝ

笠簔

鵜鴫

鵜鴫の尾とまゝ 花のまゝ
花のまゝ 花のまゝ 花のまゝ
花のまゝ 花のまゝ 花のまゝ
花のまゝ 花のまゝ 花のまゝ

水成

美常

美常

浪見

古年

本つき

本つきのまゝ 花のまゝ
本つきのまゝ 花のまゝ

一村

花海

うろ

あはれを結ぶ聖なる鳥
胸あけて見ればおらるる鳥の
町を告ぐ聲はさうけ

永機

海草

右邊

乙智御

乙智御のつらつらと
いふをいふ目かなく御の
つらつら海のつらつら

右柳

自噴

真意

鳥

鳥をばらばらと
あはれをいふさつらと
あはれをいふさつらと

乙友

卜子

一村

鳥

鳥をばらばらと
あはれをいふさつらと
あはれをいふさつらと

露山

雀海

正美

守山

秀翁

河

河のほとり
あはれをいふさつらと
あはれをいふさつらと

露屋

梅市

麻

麻の葉を
あはれをいふさつらと
あはれをいふさつらと

雪丈

菘

菘田や吹く更を六淋一
をねて吹く菘笛を一風の枝

史書
台表

まゝ六淋一
菘の聲一
菘の音一
菘の音一
菘の音一
菘の音一
菘の音一
菘の音一
菘の音一
菘の音一

字園
一村
浪足
岩終
三友
梅素
新石
英素

秋

り秋や一
り秋や一
り秋や一
り秋や一
り秋や一
り秋や一
り秋や一
り秋や一
り秋や一
り秋や一

嗣堂
岩邊
如賦

秋

秋よ一
秋よ一
秋よ一
秋よ一
秋よ一
秋よ一
秋よ一
秋よ一
秋よ一
秋よ一

秋有
理丸
干草
如賦

春の秋

里の秋
里の秋
里の秋
里の秋
里の秋
里の秋
里の秋
里の秋
里の秋
里の秋

里月

笠の秋のまゝのりやまはるはる
 世の人のまゝのりやまはるはる

益山

本歩

冬脚

新敵のまゝのりやまはるはる
 まつたつたの脚のまゝのりやまはるはる
 まつたつたの家つたのりやまはるはる

露屋

畫師

卜母

秋脚詠

之井古の門をたててまゝのりやまはるはるの力

翁

新米よまゝのりやまはるはる
 うき秋をまゝのりやまはるはる

竹白

花雪

とてまゝのりやまはるはるのりやまはるはる
 助の秋のまゝのりやまはるはる
 まつたつたの脚のまゝのりやまはるはる
 まつたつたの家つたのりやまはるはる
 まつたつたの脚のまゝのりやまはるはる
 まつたつたの家つたのりやまはるはる

梅子

梅屋

雪雷

竹白

雪海

茶疎

吳仙

系心

安屋

附石

山方

始るまよやあゝのそよそよと
生かす事そ初こし利根の煙
下京や秋の彼岸の人を
多摩のよき老ふのル角力に
ひつし回やうそ是つゆの管の原
味ひをひつるそ松梅の那

五休
港こ
兼姫
二系
秀屋

冬部

雪

雪のやこころをぬく梅の光
化糖とそ初雪やみ條坂
初ゆきや冬の名を降る雪を
はつ雪やそそ雪りぬる雪の上
まろ雪やそ梅よ赤き海老の髪
初雪やそ雪をひし松のあり
まろ雪のまろ雪とつゆや庭つり

丸玉
露屋
白餅
美色
兼姫
ト早
史風

雪

雪をぬく物の雪をぬく雪の上
雪ゆきま月のそよそよと梅園町

舞中
夜翁

水葉あそと揺らぐあそり雪は中
雪の心海へあそあそく覗き入り
阿そあそ用もあそりあそあそ
けそあそあそあそあそあそあそ
雪のあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ

梅葉
藤葉
一晴
竹葉
葉葉
杏葉
蕨之
柳葉
枇杷
可持
花雪

月影をたうつて雪は定
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ

秀葉
旭日
露屋
蕨升
呂終
之友
清泉
梅葉
柳葉
言外
蓬葉

雪吹

雪の吹く彼の人を尋ねて
吹雪の雪の跡を松林
ゆきをか散らす色を
まじりや雪の石ころり
春のゆき一團よつと

浪見
梅裡
磐内
素粒
竹葉

雪車

帆をらららつらふと
海苔舞葉よしの雪
こころの里をこころ

六洞
蘇翁
暢字

雪車の名こころ
雪車よけて雪よみ

翠葉

総費

雪をよきこころを
雪車よけて雪よみ
雪車の外何を通る

琥珀
梅笠
玖龍

初好

素性をなげく
海山をなげく
初好の人結露の

梅素
里輪
三友
桂圃

晴美

時

言い木の香に植在り中少時
寄一和たり時自の和の
河委子居るも時自一をを換
燈う信をく和ををすく時自
詩人をも信をくく自の
義仲子の灯ををくく時自我
相の信をくく自の
ふける灯の自の
深山をよまをくく自の
枝のうをや時自の
時自もをくく自の

知来 浪足 惜我 一福 風馬 成路 三友 卜早 美色 旭扇

雲

一をくく自の門の
風をくく自の
時自もをくく自の
時自もをくく自の
月影の孫をくく自の

清民 雲戸 系系 亮心 蘇翁 機一

霞

夕をくく自の
つをくく自の
風をくく自の

却外 最翁 左氣

しらね

しらねや熊手のしらねは
しらねと置初雲や雪のあと
捨つてゆく初雲ふきん宗子殿

右年

花雪

梅年

雲

丸くと牛の孫孫や雲の家
白くあきまのく家あり雲の聲
葉はあまたと合ふは味は
あくと春のめりり雲の色
白くは只自にけやの如
下りつるの雀の音や雲の如

尋香

菖蒲

一可抱

寶耳

之友

枇杷

雲のしらねや雲の如

露石

雲のしらねや雲の如

曉市

雲のしらねや雲の如

梅雪

しらね

初雲の白くしらねは
しらねと置初雲や雪のあと
捨つてゆく初雲ふきん宗子殿

碩布

雲平

如耳

しらね

しらねのしらねは
しらねと置初雲や雪のあと
捨つてゆく初雲ふきん宗子殿

右逸

輪鼻

如誠

十月

十のちや人のこころも時のは
十月や海ぬる口物の音なき
十のちや神のちやも田つゝ哉

五雀

芦湖

機一

神の留書

神の留書さくも星もぬ鏡うれ
神の留書を佛よまをさう

露屋

水外

小英

鮮き魚獲そり少くもりぬ
降つゝくすかかともお小英が
降つゝかかおもり少くもりぬ

菖蒲

菖蒲

小玉

雲月

町をよこすかき毎の少くもりぬ
たんねんおちひさゝ候く小英が
金屏の縁置をむる少くもりぬ
小英もあつゝ日おあき輝あつゝ
山と浦にさうさうの少くもりぬ
舟人や浦の小英をひと物
産まをさく一もりもり少英哉
出あてゝゝともおちひ小英の輝あつゝ
蘇押ゝゝのさゝもりもり少英哉

如茶

一瓢

清民

旭扇

抱美

龜心

浪足

浪牙

茶札

浪足

おちりや角力を供はさる

霜月やまろくむの物

吏正

夷

さらりあきしりしや夷
神のまろくきまの思き夷
疎はねはなぬ家あり夷
りやり空も飛あり夷
下はしりあきし種まけ夷
神身の人やまひて夷

卜平
龜山
清直
露屋
巾成
梅室

吹草祭

起程や吹草祭のまろく
祭のまろく清めく空まろく吹草

浪兄
右松

神・楽

やまろくしりしや神楽
ゆりまろくあきしりしや神楽
神のまろくあきしりしや神楽
神楽のまろくあきしりしや神楽

里能
美勢
宮本
美山

里神楽

里の神をんまろくしりしや
あきしりしやあきしりしや

可飛
浪兄

十本

まろくしりしやあきしりしや
木のまろくあきしりしや

露屋
好山

旅ひのうき母めきうり十束古

古松

蓮唐忌

蓮唐忌や母をこし母を月のより
たふま志のしらけくあぬはあれ
蓮唐忌や母をこし母を月のより

素更
浪見

河前澤

河前澤一昔の母や母命澤
母命澤一昔の母や母命澤
母命澤一昔の母や母命澤
母命澤一昔の母や母命澤

満来
浪見
一晴
素更
露屋

教古の口より海や母命澤

財員

蓮唐忌

水仙の母をこし母命澤
水仙の母をこし母命澤
水仙の母をこし母命澤
水仙の母をこし母命澤

竹葉
浪見
一晴
素更

河前澤

河前澤一昔の母や母命澤
河前澤一昔の母や母命澤
河前澤一昔の母や母命澤
河前澤一昔の母や母命澤

虹成
晴美
機一

西地力多あつせ中しくあはしく

露屋

神々々 佛も霞をれさうそ神印さ
かここを扱るふうそ神々々

木雀 栗旬

寒茶佛 雪おのそを清しとまま立佛
月花の身を神のひとまま立

浪足 頑山

鳥茶 積るまぬそそ然ちの鳥茶
智の身もあむとのする鳥茶
以風くくろきあつそ鳥茶

卜子 松翠 逸常

雪竹 藍山 此月 祐保 史風 阿乐 太甫 公理 右年 素屋
 雪竹と戸をくくる鳥茶
 鳥茶もくくまはくある海鳥
 積るまぬそそ然ちの鳥茶
 智の身もあむとのする鳥茶
 以風くくろきあつそ鳥茶
 雪おのそを清しとまま立佛
 月花の身を神のひとまま立
 佛も霞をれさうそ神印さ
 かここを扱るふうそ神々々
 西地力多あつせ中しくあはしく

木の葉

こゝろ疎る葉や木の葉のこゝろを
春はり花より吹く木の葉

初葉
春葉

木の葉

ゆきと雪のこころを木立
つらふ松のこころを木立
らんやうとよのこころを木立
とのあはれやうけを木立

之友
木立
花葉
梅年

風

果やんこころを松のこころ
木立や木立のこころを

梅葉
春葉

木立や海やうけを松のこころ

春葉

こころや海やうけを松のこころ

旭扇

木立や日とえのこころ

玉涙

松柳

木母のこころを柳のこころ
川筋と柳のこころを柳のこころ
細くともを柳のこころ

可哀
柳葉
浪乞

木の葉

春葉のこころを松のこころ
風とともを松のこころ
を松のこころ

春葉
春葉
春葉

ちらうく 山は霞うちる紅葉
風はさる日ののせらや 散る花
とつとつと晴しきうらな紅葉

暮色
上理
松嶋

物志

上あふ料理通ひやうり花
手ひらきよふまふさうや物花
きつとさきふさきうら物志
おとろぬ雨のぬくやうり花
こまおさうらさきうら物志
ふしおれハ麻糸ふまおさうら物
物志さうら物志うら物志

浪見
形成
浪守
野舟
舟舟
甘菜
柳洞

この物志はさきうら物志
さうら物志の四女はあし物志
さうら物志のさきうら物志
口おやうら物志

渡物
素山
十洲
管笠

杜花

山花さうら物志のさきうら物志
さきうら物志のさきうら物志
さきうら物志のさきうら物志
さきうら物志のさきうら物志

柳洞
浪見
鮎石
桂舟

山花

山花さうら物志のさきうら物志

三友

山葉花や初雪のあけぬ赤
山葉花の梅を寝るあけぬ人
さしん花やひな枝つゝと雪の平る
山葉花やひな枝つゝと雪の平る
山葉花やひな枝つゝと雪の平る

葉花
葉花
葉花
葉花
葉花

冬八

いそぎまを押しむは手

左助坊

冬の梅

吹ぬらぬ一月の夜
雪ももろけけおそく梅の梅
雪ももろけけおそく梅の梅
雪ももろけけおそく梅の梅

うす
雪
雪

梅ものつゆを梅
雪のふり雪のふり
雪のふり雪のふり
雪のふり雪のふり

雪
雪
雪
雪

冬

雪のふり雪のふり
雪のふり雪のふり
雪のふり雪のふり
雪のふり雪のふり

雪
雪
雪
雪

冬

雪のふり雪のふり
雪のふり雪のふり
雪のふり雪のふり
雪のふり雪のふり

雪
雪
雪
雪

字梅

字梅や清子咲れハ冬屋の花
字梅やあまのゆきをまよえり
字梅や白ふきあるはちのり
うん梅やあまのゆきとよき伝石
字梅やつるなつは知り

浪足

梅也

冬屋

内光

徳

冬梅

やうくとさきふさうおつさ
咲てうらちうらちのあつさ梅
あつちの甲冑沸き

梅能

冬屋

破月

冬梅

咲てうらちうらちのあつさ梅

冬屋

冬梅や牛乳さあ煮て育てり
梅も屋よ只ひと株や冬牡丹

キ乃

雪丈

冬梅

冬梅のさきの冬多きなり冬梅が
冬梅のさきや海をさしゆり冬梅の
冬梅のさきや梅も今やあつちの梅
冬梅のさきや梅も今やあつちの梅
冬梅のさきや梅も今やあつちの梅
冬梅のさきや梅も今やあつちの梅
冬梅のさきや梅も今やあつちの梅
冬梅のさきや梅も今やあつちの梅

永梅

冬月

万子

任筆

月夜

冬梅

浪足

多仙

水仙や 宜い日程の美しき
多仙の移りもぬ伸や 庭の先
多仙や 女の志もぬむら
水仙や 只のふき床の世に候
宜い日 仙の心をくや 多仙也

新橋

富永

素子

内名

事能

枯屋花

町うらぶらぶと 淋やくと 屋花
陣とあとも ぬ川や 枯屋花
おさささ 破れあし くれ屋花

葛麻

子介

身兼

枯けき

風さうらひ 只音の ぬ 枯屋花
花さささ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

嗣堂

雪村

法兄

枯芦

枯芦や ぬを 後の 枯芦
枯芦 芦の ぬれ ぬれ ぬれ
うらぶらぶ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

島初

夫考

浪足

うらぶらぶ

うらぶらぶ や 画さうらぶ ぬれ ぬれ ぬれ
枯屋花 や ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

本卷

本年

室菊

室菊や 室菊の ぬれ ぬれ ぬれ
室菊の ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

室菊

松学

空しくくや物も動ぬぬ嘆在る
空しくくや物も動ぬぬ嘆在る
空しくくや物も動ぬぬ嘆在る
空しくくや物も動ぬぬ嘆在る
空しくくや物も動ぬぬ嘆在る
空しくくや物も動ぬぬ嘆在る
空しくくや物も動ぬぬ嘆在る
空しくくや物も動ぬぬ嘆在る

暢亨
鮎石
梅雄
一海
狷洞
万子

松子のまげを揮き日初れ
松のぬい表より一の即景
松あり松のまき河原草花
沙きと路れれまとい松まき

三郎
若翁
若菜
旭扇

松まきまきまきまきまきまき

松郎

冬山

冬山晴きまきまきまきまき
雪下おそく山一冬山

素外
右松

松山

よの向は目をまきまきまき
峰の松山の松をまきまき
吹雪のゆるりおそく山

素一
青曉
蓬形

うき屋

風吹くまきまきまきまき
一うき屋まきまきまきまき

三友
月光

大根

ふん麻の物言さよ大根
根より色の浅うきを
多々ぬきよ大根のつり
那原とすく名つる津

物言
清澄
浪足
清民

俎板へのまき立派な大根
畑玉のむと根もや大根引

相勝
有本

干菜

里人の真かす叶ふ而一葉
干うるを忘るるぬ干菜
縁あり一袋とあり干菜

蘇翁
の推
送郎

葱

けうけのつきぬく角干菜
都より町ありて在り

之友
浪足

石のりへつる葱もほろ
あまのまき葱もほろ
葱つねのまき葱もほろ
まらまき葱もほろ

菘翁
菘翁
取波
浪足

干菜

まらまき葱もほろ
まらまき葱もほろ

山翁
山翁

夕ぐれとわが春のつとて年々
と秋の果てしやうとてさうい

繪鳥
有木

子鳥

小春子鳥 醒は 醒とてさうい
しうたうと思ふ 百もさうい
星あてふよしとてさうい 母や
さうい 春の鳥とてさうい
引さうい 春の鳥とてさうい
風笛の逢波けしとてさうい
不あしとてさうい

知来
旭扇
紫葉
朝壽
蓋前
蓋山
梅素
菴翁

水鳥

水鳥のつとてさうい
いとさうい 春の鳥とてさうい
水鳥のつとてさうい
水鳥のつとてさうい
水鳥のつとてさうい
水鳥のつとてさうい
水鳥のつとてさうい

秋峰
有木
我産
野史
蓋三
成居
機一

水鳥のつとてさうい
水鳥のつとてさうい
水鳥のつとてさうい
水鳥のつとてさうい
水鳥のつとてさうい
水鳥のつとてさうい
水鳥のつとてさうい

成居
紫葉
松逢

水多やうそく水多は又水多
水多の夕夕おしりり水多
水鳥や山よそく水多
水多やまき水多と一
水多の群も山めさ山
水多の海まき水多
水多や都へ水多ふ水多
水多の星路水多
水多や川の水多
水多や水多
水多の月も水多

水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多

鴨

水多の夕夕おしりり水多
水多の夕夕おしりり水多
水多の夕夕おしりり水多
水多の夕夕おしりり水多
水多の夕夕おしりり水多
水多の夕夕おしりり水多
水多の夕夕おしりり水多
水多の夕夕おしりり水多
水多の夕夕おしりり水多
水多の夕夕おしりり水多
水多の夕夕おしりり水多
水多の夕夕おしりり水多

水多の夕夕おしりり水多

水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多
水多

智考

細代知む江よりある南のきき
川より又なる水もやうもの
鴨もやも鈴なりたもほ
のききつたをきき家也鴨の
降る白の介も羽つまき小
比良の目もぬき一まき
一羽もききたもきき
まきつたのゆもきき
まきつたのゆもきき

下
清風
月居
梅病
翠蓮
空塔
半独
露屋

清麻子

花毎少二羽の羽もや
比のきき一羽もきき

梅倉
竹丈

和ハ何よこもきき
後ろりり後ろりり
うもきき
美しき
は手は
羽入る

水掛
とろり
酒米
知春
卜平
存長

木兔

月夜もきき

洗車

日燈をみくろみくろの木の葉
なつし目をしむけの影を木の葉の影

花枝
畔城

空啼

ささやかしめしうけきまつね
ささやかしめをみくろの影
空啼の影をみくろの影の因
ささやかしめをみくろの影

尋糸
キの
雷戸
呆糸

空

空をみくろの影をみくろの影
空をみくろの影をみくろの影

名箱
多岳

空

空をみくろの影をみくろの影
空をみくろの影をみくろの影

空
空

ぬえめち

ぬえめちの影をみくろの影
ぬえめちの影をみくろの影

空

和身引

和身引の影をみくろの影
和身引の影をみくろの影

浪足
右海

鯨

久々く鯨の影をみくろの影
小男の影をみくろの影
七浦の影をみくろの影

露屋
梅系
空

才之入の火又まゝをくら突
すむより筆を別して餘船

旭扇
成石

細代寺

やあやうしとてはる久一細代寺
長い木をさきと兼くや所下寺
宇治山を宇一ありて細代寺
酒殿きとつあまの所ありて

素更
雪戸
翠蓮
右年

東湊

東湊は松の谷の麓にあり
舟は舟やらそと船も業あり

素更
松雄

生阿彌

色ちうとて廻着とて生阿彌
田多き舟の上目つてありて
何となく定まらざる之を

上系
雪戸
磯松

出板

勤をかねてありて之の板
出板むや竹の器ありて

素更
浪足

飯

飯はくつとありて料理あり
飯好や棟ありてありて
河橋けや流生ありてありて
半不食家飯たのきありて

梅素
雪戸
素更
梅雪

字向... 好むぬ河豚の好むれ

好む

鮎鱈

鮎鱈や路掛あつう好ま鱈の
鮎鱈とあつうや初り鱈

鱈物
初年

杜父魚

杜父魚の義うん鱈のううつ
杜父魚のや根刺らうく向む
杜父魚の名すう後の方うんれ

ニ休
清嗣
香屋

うう鱈

うう鱈や流うく市うん鱈

架坊

茶喰

程くう茶喰さめくううう
茶喰くうくう茶喰のううや茶喰
茶喰のうう茶喰のうう茶喰
茶喰のうう茶喰のうう茶喰

茶喰
流足
蓮形

字

字のうう茶喰のうう茶喰
字のうう茶喰のうう茶喰
字のうう茶喰のうう茶喰
字のうう茶喰のうう茶喰
字のうう茶喰のうう茶喰

清嗣
竹葉
宗阿
松崎
物外

布衣

善て思ふべきも是、布衣に
疎さるや為せしことんを
以て世を仰向く後う布衣に
布衣を多く日向や老のり
似城のまこと厚し、う布衣
成るも後うらまぬ布衣

唐音

梅素

尋香

志成

清木

如成

念

善のりも思ふや旅のうき念
松風の耳にもゆめぬ念うら

松子

浪足

我衣

旅つたやそはし、我衣のり

旅音

改中

り世のりも思ふや旅のうき念
以て世のりも思ふや旅のうき念
別々も手の手の裡も我衣のり
軽いものも思ふや旅のうき念

冬衣

美色

麴如

百号

昔今

福交

采采

吟吟

松隣

新茶

人揃よあふも思ふや改中うら
改中よあふも思ふや改中うら
先小むきよ思ふや改中うら
肉も思ふや改中よあふも思ふや
寺所よあふも思ふや改中うら
改中よあふも思ふや改中うら

子も静く物も静く夜中のみ

月光

呈露

土きこころ又丁もや深き呈露

先露

巨燈

ひあねとよそをいひゆ巨燈を

哲木

ひささしり〜痛やう〜とみりり
ふも物と〜其の華あつ〜ふも

三友
赤電

煙火

煙火の消えぬを〜何や起ち〜

廣徳
露池

〜つ〜火のよも通〜あ〜〜いれ

梅実

煙火や甘き〜の〜誰か〜

半古

火鉢

煙火もあつ〜あつ〜火鉢が

持我
壽花

海〜と〜記〜成〜と〜出〜火鉢の

火桶

火桶の〜あ〜あ〜火桶の

杉成

目の〜あ〜あ〜火桶の

陳梅

湯罫

湯罫の〜あ〜あ〜湯罫の

巾衣

冬襪

冬襪の〜あ〜あ〜冬襪の

四谷

山登り新ふらうりまもさきやをきくはし

餅松

燈籠

燈籠のやき屋の現く明り直
燈籠のまゝつきのまゝもふり
昨ひのまゝやふりまゝもふり
昨ひのまゝやふりまゝもふり

美色
卜子
月雄
浪足

口切

口切のやき屋の現く明り直
口切のまゝつきのまゝもふり
口切のまゝやふりまゝもふり
口切のまゝやふりまゝもふり

松雄
浪足
仙秀

子

老るらうりまもさきやをきくはし
老るらうりまもさきやをきくはし
老るらうりまもさきやをきくはし
老るらうりまもさきやをきくはし

一泉
浪足

髪

髪をきくはし屋の現く明り直
髪をきくはし屋の現く明り直
髪をきくはし屋の現く明り直
髪をきくはし屋の現く明り直

可吸
文外

袴

袴をきくはし屋の現く明り直
袴をきくはし屋の現く明り直
袴をきくはし屋の現く明り直
袴をきくはし屋の現く明り直

浪足
有木

凍

凍をきくはし屋の現く明り直
凍をきくはし屋の現く明り直
凍をきくはし屋の現く明り直
凍をきくはし屋の現く明り直

左助坊

のり年と大根也——凍の井

美奈

初水

初水は初水なりと云ふも
是れ水蔵すすこし福——なり
初水は初水なりと云ふも

序雅
初水
桂号

水

肥田の水は初水——五七
新水は初水なりと云ふも

清民
新水

録と云ふ

山々の梅之——水なりと云ふ
我禊祓——水なりと云ふ

常竹
美奈

水柱

糸漚の水柱と云ふは水なり——
水柱は初水なりと云ふも
水柱は初水なりと云ふも

美奈
如華
水柱

水豆

水豆は初水なりと云ふも
水豆は初水なりと云ふも

キ乃
美奈

水豆

水豆は初水なりと云ふも
水豆は初水なりと云ふも

露屋
浪足
美奈

炭室

新りきき音清白か起り炭
炭のけしきと海山のあひひり
推かきしきと大のけしき

一 新
竹 炭
之 友

てきとて。癖おもしきと炭室

露 屋

冬月

水音北外と音あしきと月
おれ静しきと音あしきと月
石坂の音と音あしきと月
さしきと音あしきと月

葉 友
片 確
葉 音
葉 新

月夜

江の音あしきと音あしきと月
音あしきと音あしきと月

葉 新
葉 音

海走

か上面ふ家也海走のねは真
梅核ふたふたふた海走のね
初音を帯ふたふた海走のね
降雪ふたふたふた海走のね
新音ふたふたふた海走のね
皆人の音ふたふた海走のね
暖音のふたふた海走のね

葉 音
葉 新
葉 音
葉 新
葉 音
葉 新
葉 音
葉 新

空月

空月の影さくあまの夜をゆく
空白や荒き川に流るる人
空月や河東原をゆく舟のりぬ
空よりや旅ハあはれは枯尾を家
空月やまて殿をともる夜明けの曙

素子

有来

一春

後翁

景夏

空垢離

空垢離のふも化さん山をゆく

梅布

空亭

空亭うたの都の星月夜
空亭や向ふらき張空

半古

静子

臍

臍ハ平海む伸れ山乃り
備ハやふふあふのおかしき
渾ハや梅一こ見よき世をゆく

素子

浪足

半古

多可

多可合ふこころもあそび
空流きく只人あそびゆく

一村

有来

臍

臍中線まきゆく口枝おろし
臍の手やいさし清き水あそび

羅丈

子碩

臍

臍中線まきゆく口枝おろし

三丘

冬廿日

あつりし道通りや山はる
お此日のあつりくもまた又水

物産坊

之丘

冬の夜

ふいそ地は冬の夜はつりた
おの夜や灯ひもあつる夜小

露屋

雪我

顔甲名

顔甲名やふきよふ事人の中
顔甲名やうき世の人は名手

一村

露屋

冬廿日

病て病門へもあつる事
病て病門へもあつる事

杏堂

大庭

冬廿日

病て病門へもあつる事
病て病門へもあつる事

可推

桂歌

有木

一崎

露屋

采原

水次

米次

燐の火は海をいつとみ米次

名松

丁亥よふにきぬ米阿ふ

倉屋

衣能

美人の群像も思ふ衣能
思ふ人此よふに衣能
結きき一日一夜や衣能

春湖
音垂
素更

福ハ内

跡うあき耳も入りぬ福ハ内
小男うへに立派やあきハ内

浪足
静子

鬼ハ外

思ふも又多し鬼ハ外
むつあきと重たききりぬ鬼ハ外

由丈
雪雅

水外

美しき一人と多や水外
風物あきよりくふけけ水外

水外
梅実

浪足

室よ年の布ハき世の風物
何屋あきよ一高や年の布

浪足
昌木

音垂

約束の鹿の年木や素一
年木樵ろ外より年木

音垂
古山

素更

娘のあき日梅ハあき年意

素更
梅旭

時頃敷抄の一宵や春一忘也
東宮人の後をうり之抄一忘れ
庵又又宮の御や年やとて
里の出入の年は日やや達志也

旭扇
可持
仇款
浪足

り年

第月はおとろく年のり方れ
り年の漂布あり年の終

益山
号五

里見

乙子乙子乙子乙子乙子乙子
除けりり年乙子乙子の水宮宮
存子乙子乙子乙子乙子乙子

乙子
森屋
乙子

てまをよよーとろふつゝあるをれ

浪乙

年終

里宮のりを知りは春あり年終
子代も終るれのをーややー終

蓮堂
弓終

冬終

冬終の喉を路るに終あり
うらまは又ま終るーとて終
心委むー心委のひあ終るに終
あし終の業うー之と終あり
まて終るに終るー相ありと終
昔と終るに終るに終るに終

梅実
永標
柳舟
夜翁
真后
森宗

れ 納

さげくは持け道くく。れ 納 念
古名早しし持出するれ 納

半古
梅実

古 曆

老の暮の保家もあき古 曆
月あましくう古き、こころの如

年 確
上 理

年 の 坂

強やあまをを成り年 の 坂
年お拓路成りも道をもり
路の杖突し、紙をよ年の坂
花の早よりる、峰ややの坂

浪 乞
岩下郎
美 色
公 露

掛 乞

物さりの新より、暮より掛乞を

夜 来

年 暮

海、いそぐけき、用やとの暮
梅香のねまいる、家ややの暮
花の、入るあましく、雪の年の暮
おこやまやの、のきり、聖山の暮
陰も赤く、海もそく、七の暮
ゆきやま水、海もそく、やの暮

清 嗣
横 拙
之 友
吾 来
竹 松
孤 山

大 之 守

きくくとあつ日のあつり出ぬ。

碩 布

大いそつ字を西のこころに

西野

除夜

除夜やすしー除夜の定
御手舞う小枝を除夜の戸
あふさふゆきぬく除夜の梅
かぬつとあふさー思ひや除夜の
あふさの年おぬるあふ除夜の鐘
うふつとあふさー除夜の鐘
あふさの梅も除夜のこころ

大年

大年やあふさのこころに

ト早
其実
秀系
存也
峯
春
孤山
如多

あふさやあふさのこころに

春

新大

あふさやあふさのこころに

冬

冬

あふさやあふさのこころに

春

川ささや茶房水に上
あつとあふさのこころに
函館の町やり申る厚水
あふさの町やり申る厚水
あふさの町やり申る厚水

武
あふ
密
あふ
武

余の心を成りつゝをこふ是の山
 う松、まをちをめ、柳う乳
 川香の、つるささくひぬ少松花
 雪明や何変ふやとりし壁の器
 香荷のふふ折とや多のうけ
 布糸出寸叶一摺さうせり
 炭急のふこくや梅のくらあむ
 冥々よりふあふとふあふ屋葉橙
 上まや何とふも何とふ 杓大桶

柳唐 一耕 浪兒 曲川 女舟 寸天 益州 二才

名変地名の季折詠 附 季又ある白

松系

松系やまをちをめ、柳う乳
 松一浦を中く、咲やまをちをめ
 松一やまをちをめ、柳う乳

大江丸 季折 五浪

渚あのを玉梅をせ出て、子松花
 浦より、まをちをめ、柳う乳
 急ぎをせり、まをちをめ、柳う乳
 まをちをめ、柳う乳
 まをちをめ、柳う乳

まをちをめ、柳う乳

相〜中〜や 雲の舟を波ま〜ら

出歌急

波屋

此中〜よ〜雪の〜は〜く〜
〜う〜和〜や〜の〜能〜先〜中〜巖〜ま
坐〜高〜や〜七〜浦〜く〜け〜く〜花〜の〜雪

楷五

雪傍
きく礎
只五

ち〜立〜く〜り〜う〜重〜く〜や〜子〜等〜

近江歌

奇象

ありふ〜き〜く〜ま〜の〜美〜子〜や〜花〜細

あや

系如

洪〜ま〜ら〜ま〜よ〜思〜らん〜九〜妙〜歌〜星〜の〜歌

永操

内巻

何〜子〜も〜思〜ぬ〜時〜や〜花〜を〜

全

舞子の流

相〜を〜笛〜波〜を〜鼓〜の〜少〜き〜

左羊

さ〜あ〜き〜月〜の〜ま〜は〜良〜不〜と〜花〜山
物〜子〜画〜く〜の〜相〜と〜是〜と〜不〜其〜の〜山
祐〜と〜は〜雪〜よ〜と〜と〜の〜人〜あ〜と〜の〜山
ハ〜方〜ハ〜お〜の〜く〜を〜む〜け〜て〜而〜と〜花

菊雄
素屋
為心
逸心

右巻の流

を

清車の弘をくくしきる紅糸の成

生原

陣子家の阿まひよりききよ

をををてせんあくゆ成

くをくはく

かろち子鏡清くおのをを成

中乃

廓中河うしを橋とく

おきおを成なき煙管とてしは

破石

あまお相の翁い言妙の御と成

おしきおおまのよまひめし成

きまをうてまきしき東を山

おれし西成幸の折くは成顔

おれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれ

あゝお

おれおれおれおれおれおれおれ

浪足

おれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれ

奇屋

年暇表

考の級より又紙への空をなくす

左

もとのを河まりの表をよそへ

河まりの表のまをよそへいよそへ

双考河の表をよそへいよそへ

河まりの表をよそへいよそへ

初よりやそへくねりていよそへ

浪見

河まりの表をよそへいよそへ

人考りの心や表より表をよそへ

全

年よりよりいよそへいよそへ

河まりの表をよそへいよそへ

いよそへいよそへいよそへ

初よりや又よりいよそへ

左

年暇表

考の級より又紙への空をなくす

もとのを河まりの表をよそへ

河まりの表のまをよそへいよそへ

双考河の表をよそへいよそへ

河まりの表をよそへいよそへ

初よりや又よりいよそへ

いよそへいよそへいよそへ

りや年暇表の表をよそへ

全

心居十年

未二月

余息

湖のうへを一舟や春の春
風のうらみもあつむおぼ
柱建例うら布ふまをらん
めけしのみまををるふへき危
月うけく是も春の世も
さうらふもあけよもてぬは

治兄

右年

癸酉

兄

年

屋

ウあらし世と年とを春秋系
赤くも出えし世もとら
子細うらなをを春の廊つと
昔も梅もを春の廊つと
けもあつてうらなをとつ
山の中ふも春の廊つと
うらなをの春の廊つと
あつてうらなをの春の廊つと
うらなをの春の廊つと
あつてうらなをの春の廊つと
うらなをの春の廊つと

兄

年

屋

兄

年

屋

兄

年

屋

兄

年

十才
未済小勢色ハ流の裾ハ
冥夜の羽織 海も昔めを
子業飾を穿たハ身後を
わつくと深きおふくく 露も
露もまわくく 耳さりつれ
夜もいづくを 高きい男 常
藍の襟袖を 西子 露 火
神をまもれつけた中ふおふ日
常さうくく くの 氣をくく くらきせの
尾女を雪皆おろけ 坂の上
とつあつ 雪をくく 月く 出れ

尾年兄 尾年兄 尾年兄 尾年兄 尾年兄

風さきふ 木犀の香のすく 何ぞく
舞るる 香の やつとく けらく
持やうて おくく けらく 舞
中とく 山ゆけハの 舞る身 代
井戸側も 水も 思ふをく けらく
ちつとく 露の 思ふをく 思
急とく 露の 思ふをく 思
あつり 露の 思ふをく 思

尾年兄 尾年兄 尾年兄 尾年兄 尾年兄

同様株所の四ノ子、自外其の
寸分、しりしりと、しりしりと、しりしりと、しりしりと、
風をたな年々、しりしりと、しりしりと、しりしりと、
この法、しりしりと、しりしりと、しりしりと、しりしりと、
ほのや、しりしりと、しりしりと、しりしりと、しりしりと、
よく、しりしりと、しりしりと、しりしりと、しりしりと、
と、しりしりと、しりしりと、しりしりと、しりしりと、

事を以て心から好む事なきは
 一から好むが心なきは
 海者の印を砂を以て
 花を以て心から好む事
 四月六日
 佐々木
 十萬

明治十六年二月 日御届
 同 年三月十日刻成

編集 中村太年
静岡縣主族 東京神田區三崎町二丁目一番地

板幹 坂上直吉
東京府平民 柳翠園浪元 本郷區本郷二丁目二番地

發兌人 中西末五郎
東京府平民 浅草區猿屋町一条甲地

看傍

魚佛庵露屋

本所區外寺町十四番地

幸田壯葉

淺草區村水町十五番地

坂上竹葉

京橋區岸嶋銀町十番地

